



緑をつなぎ、笑顔をつなぎ、未来へつなぐ。

つなぐ

TSUNAGU
NUMBER

17

新年度にあたって

Countryside Stay市場を確立することで日本国内における農山漁村の
所得向上・地域の活性化をめざします

平素より本会事業にご協力をいただき、まことにありがとうございます。平成30年度の事業が始動するにあたり、ひと言ご挨拶を申し上げます。

昨年度は、JAグループのみなさまからのご支援により、創立50周年を迎えることができました。厚く御礼申し上げます。

本会は、昭和42年に社団法人として発足しました。その後一貫して、農山漁村地域の活性化、都市と農村の交流促進を事業の柱に、JAグループと連携を図りながら取り組みを続けております。

さらに近年、農林水産省が提唱する「農泊」推進について、株式会社農協観光と連携しながら、積極的な展開を図っています。農泊を全国に普及するため、農林水産省の交付金を活用して、昨年7月から9月まで全国9ブロックにて、シンポジウムを開催し、計1232名のみなさまにご来場いただきました。また、今年2月から3月にかけて、

「農泊シンポジウム2・0」を全国5会場（札幌・仙台・東京・大阪・福岡）で開催し、農泊のさらなる認知度向上、農泊実践者と支援事業者双方の商談が活発に進むよう「ビジネスマッチング」の機会を提供するなど後押しを行い、計677名のみなさまにご参加いただきました。

さらに、今年2月、本会・株式会社農協観光・株式会社百戦錬磨・株式会社時事通信社が発起人となり、「一般社団法人日本ファームステイ協会」を設立しました。この団体は、「農泊およびファームステイ」を営む事業者を支援し、旅行者が繰り返し訪れたいくなる地域の魅力や、セールスポイントを創り出すことを目的としています。サービスの品質向上・維持・情報発信によって、国際水準に合致した

「Countryside Stay 市場」を確立することで、日本国内における農山漁村の所得向上、地域の活性化をめざします。農泊は、2020年までに、全国500地域での取り組み創出を目標としており、本会は目標達成に向けてサポートしてまいります。

今年度は、中期経営計画（3か年）の最終年度



一般社団法人
全国農協観光協会
代表理事 会長
倉重 博文
Hirofumi Kurashige

となり。公益目的支出計画の着実な実行と、磐石な経営基盤を確立することにより、都市と農村の架け橋となる中間支援組織としての役割を遺憾なく発揮し、会員および地域の負託にお応えできよう一意奮闘してまいります。みなさまの一層のご支援をよろしくお願い申し上げます。

EXPOにも出展しています！

本会は、農泊推進および各事業の広報・商談活動として、平成30年2月21日から23日までの3日間、第1回地方創生EXPO2018(幕張メッセ)と、インバウンドマーケットEXPO2018(東京ビッグサイト)に出展しました。それぞれ3日間の来場者数は、地方創生EXPO=23,876名、インバウンドマーケットEXPO=13,895名(2月26日現在速報値)でした。今後もEXPOに出展するなど、広報活動を積極的に行い、本会の認知度向上に努めてまいります。



「外からの目」で気づく
地域の魅力

清水…先生のご著書『地域文化が若者を育てる』を読ませていただき、「われわれがめざしていることとまったく同じだ」と感じました。地方が元気になっていくうえで、地域の文化が果たす役割とはどのようなものでしょうか。



KIYOO SHIMIZU

清水清男 全国農協観光協会
代表理事専務

人をひきつける力として文化というものを捉え直す必要がありますね。

佐藤…全国にはすばらしい伝統文化が多数ありますが、それが失われ、忘れられてしまった。都会の消費文化が拡大し、若者にとって、地域の伝統文化には魅力がないとされてしまう状況を、直視する必要があります。

清水…都会を重んじる風潮の中で、地方文化が置き去りにされてしまったわけですね。

佐藤…そうですね。民俗芸能はかつて地域の青年団

などが主体となって、先輩から後輩に伝えていく仕組みがありました。これが本来の地域文化の姿だと思います。

清水…先生は各地の事例を研究なされていますが、取り組みとして印象深いものはありますか。

佐藤…農村の伝統文化と都会からの創作的な現代文化が渾然一体となつてうまく融合しているなど感じたのは、長野県飯田市です。ここでは人形浄

瑠璃が江戸時代から伝えられてきたのですが、それが風前のともしびとなりかけたときに、地元的首長が「東京発の画一的な文化に飲み込まれてしまったらいけない」という危機感から、全国の人形劇団を地元で招いてカーニバルを開いたんです。

すると各地から来た劇団員の方たちが、飯田の人形浄瑠璃を見て「すごいじゃないですか！」とび

つくりした。それで地元

の人たちが「あ、そんなにすごい文化が地元にあったのか」と逆に気づいたというんです。

清水…「外からの目」は重要ですね。

佐藤…そうですね。地方の人は地元のものをつまらないと思いがちで、自ら価値のあるものを手放してきた側面もありますが、そうやって外から評価されると、「え！そんなに素晴らしいものがあつたの？」と、再認識するきっかけになります。

清水…わたしたちも30年にわたって「民俗芸能と農村生活を考える会」を開いてきました。これまでは各地の芸能を東京に招いて公演していたので

すが、地方の人が自らその価値に気づいて再確認しなければ地域の活性化

につながるという思いから、今年には地方公演を行うことにしました。

佐藤…それはすごくよいと思います。イベントと

TSUNAGU TALK

人と人とのふれあいが
育む地域文化

人の生き方や社会のあり方についての研究を行う
佐藤一子先生をお迎えし、地方の活性化と文化の関連性についてお話を伺いました。

聞き手=清水清男 まとめ=常瀬村泰
Interview:Kiyoo Shimizu Edit:Murayasu Tokose



1979年に始まった「いいだ人形劇フェスタ」は、多くの人の心を魅了し、いまや4万人を超える動員数を誇る

いうのは大きなきつかけになりますし、肝心なのは、それをいかに持続的な営みにしていくかということですね。

**若者の背中を押す
地域文化の力**

清水.. 小さい頃からの体験や教育も非常に大事ですね。

佐藤.. おっしゃるとおりです。子どもの頃、親といっしょに祭りに行つて興奮する。祭囃子の音で覚えて、学校や地域活動などで楽しみながら学んでいく。やがて若者になり、就職して都会に出ても、祭りの時期になると「帰りたいな」と思う。それは、体にしみついている音やリズムのすばらしさがきちんと残っている証拠ですよ。

清水.. 一方で、農業農村の構造的な衰退という問題もありますが……。

佐藤.. そうですね。地元が好きだという若者がいても、仕事がないから出て行かざるをえない。か

つては農業高校や工業高校を卒業して、地元就職して民俗芸能をやる、といったような生き方が選択肢として可能だったのですが、今はなかなか難しい。

清水.. ただ、農業を志す人が増えているという現象もあり、それには勇気づけられますね。

佐藤.. そうですよ。一度は都会に出たけれど「ここは私の住むところじゃない」と地元に戻る若者が増えていると感じます。その時に「戻ろう」という気にさせてくれる牽引力の一つとして、地域文化の力は大きいと思います。

清水.. せっかく「戻りたい」と思っても、貴重な文化が失われていては元も子もないですからね。

佐藤.. そうなんです。文化というのは、単純に経済力としてすぐに活用できるものではありませんし、経済のために文化を手段化するのとは不可能だと思います。

清水.. そういう意味でも人をひきつける力として文化というものを捉え直す必要がありますね。

佐藤.. はい。「自分は別に民俗芸能そのものには興味がないんですよ」なんていいながら、一生懸命運営の手伝いをしていく若者たちがいます。話を聞くと、「宣伝や普及の活動がおもしろい」という。

清水.. ああ、それはよくわかります。

佐藤.. 文化で地方を活性化していく活動というのはとても総合的な営みで、そんなところの会社組織などでは体験できない、大仕掛けなシステムで動いたりする。それが楽しいんです。外国の人たちを案内するには語学能力が必要ですし、ホームページを作ったりSNSで発信したり、ポスターを作成したりという仕事、これはお金の問題じゃない。担い手としてのプライドなんです。

清水.. そういう若者たち

の力をもってすれば、海外に発信することだって容易ですね。

佐藤.. そのとおりです。地域の伝統文化が、国際発信できるくらい創造的な組織と活動になっていったとき、若者たちの目は輝き始めるんです。「自分たちのやっていることは世界に通用するんだ！」という自負ですね。ただそこで、「世界に発信するためには外国人に來てもらおう」というような単純思考になってはだめです。

清水.. なるほど。

佐藤.. たとえば学校教育の現場でふるさと学習の一つとして取り入れるとか、障害者の方々が学ぶことでセラピー効果をもたせるとか、高齢者の活動として取り入れるとか、民俗芸能がもつ複合的な価値に着目しながら地道に取り組んでいく必要が

あります。人と人が行き交うこと、ふれあうことで発展するのが文化ですから。

清水.. 交流とふれあい。それはまさにわたしたちの事業の根幹でもあります。

佐藤.. すばらしいですね。JAや自治体といった関係機関が協力し、各地の成功体験を共有しながら、樂觀もしないし悲觀もしないというスタンスで根気強く取り組んでいきましょう。

地域の伝統文化が国際発信できれば、若者たちの目は輝き始めるんです。



KATSUKO SATO

佐藤一子

東京大学名誉教授。専門は社会教育学・生涯学習論。地域社会における学びとコミュニティ形成の関係を研究する。著書に『地域文化が若者を育てる～民俗・芸能・食文化のまちづくり～』（農山漁村文化協会）がある。

平成30年度 旅行業務に関わる各種研修会 国家試験対策講座のご案内

本会は、JA組合員や地域住民の余暇・観光レクリエーション活動へのニーズに応えるため、旅行業務に関する研修会を各地で開いています。その目的は、JA旅行センターなど、旅行業関係者の業務遂行能力の向上や資格取得の拡大です。そのほか、観光産業への求職者などの人材育成を支援するため、さまざまな研修会を行っています。

旅行業務に関わる各種研修会

●旅程管理研修

本会は平成5年、運輸大臣(現国土交通大臣)から「旅程管理研修機関」の指定を受けました。以来、JA旅行センターなどの旅行業関係者を対象に全国各地で研修会を開催しています。事業を開始した平成5年から平成29年度末まで、「登録研修機関」として約1万4千人の「旅程管理主任者」を輩出しています。

●旅行業務取扱管理者国家試験対策講座

JA旅行センターなどの旅行業関係従業員の資格拡充と、担当職員の資質向上のため、全国各地で国家試験対策講座を開いています。短期集中講座のため、旅行業界をめぐる人のほか、類似産業に就業中の人にも好評です。公益事業ですので、入学・入会金は無料で、受講料のみで参加できます。総合・国内の両講座とも、専任講師がていねいな講義を行い、わかりやすいと支持を得ています。

旅行業法に規定された国家資格

■総合旅行業務取扱管理者資格

■国内旅行業務取扱管理者資格

昨年度(平成29年度)国家試験対策講座受講生からのアンケートをご紹介します。

～国内対策～

●配点や時間配分について意識づけができました。初めてのテストですががんばります。●短時間で集中した内容でしたが、ていねいに教わり、対策やコツなどが学べました。●合格のためには「戦略・作戦」があるのだとわかりました。

～総合対策～

●少人数でじっくり学べた。●自分の苦手な部分(勉強しなければならぬポイント)が判明した。●独学では絶対にわからない「国際航空運賃」が得意科目になった。

平成30年度「旅程管理研修」、「旅行業務取扱管理者国家試験対策講座」の各会場へのお申し込みは本会HPで受け付け中です。

詳しくは、全国農協観光協会

検索



農業検定で 農業をもっと知ろう!

平成30年1月に実施された日本農業検定の試験は、受検者総数が3,184名で過去最高となりました。このうち、JAグループ内での受検者数が、2,447名で全体の約7割を占めました(66の団体から受検いただきました!)。JA自己改革が進むなかで、検定への関心が高まっています。本会は今後も、日本農業検定を通じ、「よき農業の理解者・応援団」を増やしていきます。

平成29年度日本農業検定試験結果

	1級	2級	3級	合計
受検者数	272名	974名	1,938名	3,184名
合格率	34%	61%	74%	67%

JAみやぎ亘理との コラボレーション! 「キラキラ美人」食育セミナー



このセミナーは、働く女性のみなさまを対象に、食への興味とこだわりを持っていただき、国産の農作物を身近に感じてほしいという思いを込めて立ち上げた



新企画です。一つの食材に焦点を当て、栽培方法や栄養素など、いろいろな視点から食材を深掘りします。

2月開催のセミナーでは、イチゴを題材にしました。JAみやぎ亘理産の仙台イチゴ「もういっこ」をご提供いただき、バレンタイン向けのスイーツ作りをしました。今後も各地のJAグループのみなさまと連携して、都市から農村をPRしていきたいと思えます。みなさまの地域の特産品やPRしたい食材などありましたらぜひお声かけください。